

# ご英霊の思いに 応えるために

感染症と闘われたご英霊

第七版  
令和三年さくら祭

靖国神社

今まさに、世界的感染症によるパンデミック（世界的流行）にあります。ワクチンの接種が始まりましたが、是とてコロナウイルスが変異し、百%、完璧では無いようです。

しかし、人類の叡智によりいずれは収まると思われますが、しかし歴史を俯瞰するに、人類は感染症との闘いの歴史と言つて過言ではありません。

今、伊勢といえは神宮、それが当たり前と思つている伊勢神宮。伊勢の地に、天照大神が祀られたのも、感染症が流行つてそのことにより三種の神器を天皇の側に祀ることに恐れを抱かれ、安住の地として伊勢を探し求め伊勢に天照大神を祀つた事によります。

ところで、戦争と感染症は切つても切れない関係にあるのです。私もご英霊の記録を紐解くに、多くの方がその戦没地の記録に、一野戦病院等において逝去というのが記されております。もちろん戦闘により負傷され、それが原因でお亡くなりになった方もありますが、一方感染症において野戦病院で亡くなった方が大変多かったのではないかと考えられます。

以前、二十八年のさくら祭でお渡しした資料で日英同盟の元、地中海の守護神と呼ばれ、地中海での日本の特務艦隊の活躍を紹介しましたが、時を同じく、南方方面にドイツ東洋艦隊の搜索活動に従事すべく巡洋艦やはぎ矢矧（乗員四六九名）が派遣されました。ところが艦長のわずかの判断ミスで感染症に悩まされることになりました。

この矢矧、任務も終わり一九一八（大正七）年艦隊司令部の有るシンガポールに入港。交代艦の到着まで碇泊するのですが、この年は世界的にスペインかぜ（インフルエンザ）が流行していました。



巡洋艦 矢矧

一 野戦病院といつても本当に粗末なもので、実際は病院と呼べるような施設では無かつたようです。

艦長の山口傳一大佐はシンガポール市街を前に乗組員を艦内に閉じ込めておくのは士気に影響すると判断し、スペイン風邪のことも苦慮し交代で四時間ずつの上陸を許可したのです。しかしこの判断が悲劇を齎し十一月二十四日突如、発熱患者が発生するのです。

医官は治療に当たりながら、矢矧は次の寄港地フィリピン・マニラに向かうのですが其の洋上、感染がまたたく間に広がり、マニラに到着する前に医療班も感染、食事班も感染で食事もままならず、塩と米だけで飢えをしたので、なんとか十二月四日マニラに入港。入港時にはほとんどの乗員四〇八名が感染し、しかも副長をはじめ四八名が命を落としました。

艦長の判断ミスといえましょうが、長い艦上従軍の中、久しぶりの寄港、館長として部下に町の光が見える中、土地を踏ませてやりたいのは人間として当たり前のことで、非難するのめいがかかनाと思います。

現在この矢矧の艦首を飾っていた「菊の紋章」は大東亜戦争下、大阪空襲の中、教奇な運命のもと現在大阪護国神社の本殿に展示されております。

さてこのスペイン風邪ですが、一九一八年八月から、ヨーロッパを中心に二年間猛烈な勢いでウイルス感染症起こし感染者数およそ五億人。当時の世界人口は約二十億ですから、約四分の一が罹患し、死者およそ五千万人に登りました。

さて日本ですが、人口五千五百万人に対し罹患患者二千三百万人、死者四十万人。今のコロナ禍の比ではありません。

スペイン風邪というからスペインで発症したのかと思ってしまうですがこれは大違いで、当時ヨーロッパを中心に第一次世界大戦の終結の時期ですが、スペインはこの戦線に参戦しておりません。従って、報道も自由、従って事実が報道されています。しかし他国はまだ戦時下で、言論統制、事実が隠蔽されており、国内がスペイン



マスク着用を訴える広告

風邪で疲弊していることが敵国に解つては戦況不利ですので、どこも隠しております。そんなことから感染症がスペイン風邪と言われる所以です。



当時の様子。皆マスク着用

今のコロナもそうでしょう。その発生源である中国は、その事実を隠蔽し、コロナから立ち直り、経済成長〇〇%と国営放送が報道しておりますが、まさにこの世紀、百年前ヨーロッパがしてきたことをこの世に及んで行っているのです。

我が国では一九一八年八月下旬からスペイン風邪流行が始まり十一月には全国的に大流行となりました。当時は電子顕微鏡もない時代で原因は分かかっていませんでしたが、後にインフルエンザ・ウイルスであることが確認されており、むしろスペインインフルエンザと呼んだほうが正確でしょう。

内務省衛生局が「流行性感冒予防心得」を公開し、「咳やくしゃみをする目に見えないほど微細な泡沫が周りに吹き飛ばされるので病人、咳をする者には近寄らない」、「たくさんの人が集まっている所（芝居、活動写真、電車等）には立ち入らない」、「咳やくしゃみをする時はハンケチ、手ぬぐい等で鼻・口を覆う」ことが重要であると書かれています。

これらは現在の「咳エチケット」、「三密を避ける」と全く同じです。ただ、当時の感染対策では「手指衛生」（手洗い）に関してほとんど言われていなかったということです。おそらく病院等の医療施設では手洗い・消毒は行われていたと思われませんが、一般社会では現代の擦り込み式アルコール消毒液が手に入るわけではなく、石鹸で手洗いといっても外出先では簡単には出来ないという事情があったものと思われ

**看護婦が足らぬ**  
金はイクラ出しても居らぬ

流感の爲めさきだに足りない面に吸収されたのでますます不勝の看護婦が一層足りなくなつて居るし當局も非常に弱つた。京阪地方に看護婦の手が足りて居るし當局も苦心してゐる。りなくなつた爲め給料も非常に今は幾十圓の金を出しても既に増加して一日四五圓以上上つ看護婦を得る事が出来ないで居るから福岡県よりも此の方ふ事である

看護婦不足を伝える新聞記事

ます。

さてこのスペイン風邪が世界経済に及ぼす影響は図りしれず後の第二次世界大戦に繋がっていきます。直接にスペイン風邪が第二次世界大戦に繋がったというのは言いすぎだとは思いますが、其の時代の各種要因が加わり、時代は流れていきます。

このスペイン風邪パンデミックにより、世界経済が不安定になり、金融市場の混乱となります。この混乱状態の中、第一次世界大戦はドイツに莫大な賠償金を課せ、その結果ドイツでは一九一八年から一九二三年までの五年間で物価が一兆倍になる天文学的なインフレが生じました。



お札を積んで遊ぶ少年

その典型的な写真として子供がお金で遊んでる写真が有名です。その後、一九二九年世界大恐慌と成るわけですが、そこで各国は、自国で経済を回復させようとし、資源を持つ国、アメリカは例のニューディール政策で回復。一方イギリスは当時多くの植民地を持っており、まさに自国は小さくとも資源を持つ国であり、イギリス連邦という中でブロック経済を築き上げ経済危機を乗り切っていきます。

片や資源を持たない国。代表的な日本、そしてドイツも資源はありません。そこで資源を持たない日本は、満州進出とならざるを得なく、ドイツは北アフリカに進出したわけです。

もし日本が、資源大国であれば、又、自由に貿易が出来、原料等を輸入できれば、満州等に進出はしなかったでしょう。

即ち、感染症により、経済が不安定となり、そこにいろいろな要因が加わり其の結果、戦争を引き起こすという事に成るとも言えます。

一方戦争になれば、またそこで感染症に悩まされることとなります。日本は大東亜戦争では南方に進出しました。その一戦を紐解いてみましょう。



米兵の手にもつバグボム  
上から噴霧されている

ガダルカナル島はソロモン諸島の一角で、パプアニューギニアの東、赤道を南に下ったところに位置し一九四二年八月、日本軍がアメリカ軍と初めて地上戦を行った戦いです。

半年わたる激戦の末日本軍は大敗。二万人が亡くなりました。しかし二万人強のうち戦闘死は六千人で残りはマラリアによるものと餓死であったのです。

この戦いは日本の戦局が敗戦に向かう転換点ともなった戦いでも有るのですが、戦いの死者の多くは戦いによるものではなくマラリア感染症によるものだったのです。しかも補給路は絶たれ、日本からの兵站である「物資輸送船はことごとくアメリカ軍の飛行機により撃沈され物資は届かず、兵士はマラリア感染症に悩まされまさに地獄の島と化していました。

マラリアにかかると他の病気も併発する、頭が痛くなりめまいがする。回復しても二回目は目が見えなくなる。

元日本軍衛生兵沼田えなおさんは語る。  
「マラリアはいろんな病気を併発する。  
が食ってしまったら骸骨となっていた」

この戦いの負けは物資の不足である。大本営は十分な物資を補給することができずに戦いを続けていた。大本営もマラリア対策を怠っていたわけではない。

当時蚊の対策に有効だったのが蚊取線香である。当時の蚊取線香の原料は

死んで三日経つと顔がないハエ



除虫菊である。

戦前の日本は蚊取線香世界総生産高の約八五%を占める大生産国で、世界各国に輸出していた。其の最大の相手国はアメリカであった。しかし戦争が始まると食料生産が強調され除虫菊の確保が難しくなった。即ち戦地に送る蚊取線香の確保が難しくなり、一方アメリカを中心に連合国側はアフリカケニアで除虫菊の生産を始めた。その除虫菊を使い、連合国側はバグボムと言う除虫菊を使った噴霧式の蚊取線香に変わる殺虫器具を開発しそれを戦地にて使用していたのである。我が国は狭い国土、戦時下にあつて、食糧生産に重きを置き、除虫菊の生産を落とさなくてはならなかった。

一方、植民地をもつ國は、国外で自由に必要な資材を得ることが出来たのである。

戦後、ガダルカナル島でアメリカ軍が使っていたバグボムという除虫菊を使った噴霧式の殺虫器具を目にしていた帰還兵が、それをヒントに新たに殺虫器具を開発しました。

それを大日本除虫菊株式会社は開発者と共同で商品化し市場に出しました。それが今私達が気軽に使っているキンチョールというエアゾール式の殺虫剤となるのです。

感染症というパンデミック、本当に注意しなければいけない出来事です。